

エッセイ

随想



いしい・もとこ/照明デザイナー。東京芸術大学卒業後、フィンランド、ドイツの照明デザイン事務所に勤務。1968年、磯石井幹子デザイン事務所を設立。都市照明からシャンデリア、レーザーまで幅広い光の領域を開拓。東京タワー、横浜ベイブリッジ、姫路城など多数の照明デザインを手がける一方で、国土庁国土審議会委員などもつとめる。「東京港レインボーブリッジ」で、北米照明学会大賞を受賞(94年)。ほか受賞多数。著書に、「環境照明のデザイン」「光無限」など。

新しい光技術であるが、これを展示用に使う試みが最近活発に行われている。
クリュニー美術館の石造りの建物の中は、小さな窓の外にわずかに見える暗い雪まじりの空のため、外光はほとんど入ってこないような状態で、内部は暗い階調の中に、展示品がところどころに置かれているのが、ぼんやりと見えていた。
目指す「美女と一角獣のタペストリー」は、奥まった円形の一室に飾られていた。中に入ると暗い室内の石の壁に大きなタペストリーがかけられているのが、

光は文化のバロメーター

石井幹子

一二月の小寒い日、私はパリの左岸、カルチュ・ラタンのクリュニー美術館に向かった。あいにく雪まじりのみぞれになってきて足許が悪く、おまけに入り口をよく知らない外国人運転手のタクシーに乗り合わせたおかげで、別の建物の入り口でおろされて往生したが、目指す美術館に何とか辿りつくことができた。
明日の帰国を前に、どうしても今日ここを訪れたかったのは、パリの照明関係者から、この美術館の至宝「美女と一角獣のタペストリー」が、光ファイバーを用いた最新の照明設備によって照らされるようになったときいたからである。

博物館、美術館にとって、照明はきわめて重要なものである。光の当て方一つで、展示物は様々に変わる。優れた光によって美しく素晴らしい姿を観客に見せて、より大きな感動をさそう反面、間違った光が用いられ、まったく別のものに見せてしまう危険もはらんでいる。

また、光の中でも、蛍光灯やHID光源と呼ばれる水銀灯やメタルハライドランプなどが放つ紫外線は、美術品を著しく損なう恐れもある。知らずに使っていて、あつと気がついた時には後の祭り、とり返しのつかない場合も多い。

そんな心配が起らないものに、最近開発された光ファイバーがある。展示物の大敵でもある熱を通さず、紫外線もカットする光ファイバーは、通信に用いられ

おぼろに解った。部屋の中央に立ち止まり、目をこらしてみる。だんだんと暗順応してきた私の目に、心地よい光が入ってきた。円形の天井の中央に円盤状の仕掛けがあり、その垂直に立ち上がった細い面に、光ファイバーの端部が一行に埋めこまれてあつて、そこからタペストリーの全面に柔らかな光が当てられていた。
この照明は、いわゆる博物館や美術館の展示品に用いる「照度」としてはきわめて低いものである。しかし、目が暗さに慣れてくると、驚くほど細部まで見えてくる。

元来、私は照度は高くなるほど、人間の目は鈍感になり、低くなるほど敏感になると考えている。すなわち、オフィスで用いる七〇〇〜八〇〇ルクスほどの明るい照度になると、一〇〇〜二〇〇ルクスの差は、照度計で計ってみないかぎり人間の目では識別できないが、一〜一〇ルクスといった暗い照度となると、その差はだれにでも明確にわかる。

タペストリーの細部——女性のコスチュームの柄や、周囲の草花などが充分に鑑賞できるのも、そんな人間の目の特性を計算に入れた設計なのだろう。心ゆくまでタペストリーを鑑賞しながら、私はこの作品ができた当時の屋内の明るさは実際にこんな程度のものであつたのかも考えた。中庭から廻廊を通してまわり込んでくる光の量は、恐らく晴天の昼間でもこの程度のものであつたのだろう。とすると、この展示の光は、

作品が当初かけられていた状態を最新の光によって再現したものかもしれないなかつた。

現在、世界の博物館、美術館では、専門の照明デザイナーやコンサルタントが力を尽くして、見事な照明設計で展示品を見せているケースが増えている。ルーブル美術館でもここ数年で照明が著しく改善されたし、ニューヨークのメトロポリタン博物館も、きめ細かい照明で展示品を効果的に見せている。

一方、日本の状況はというと、残念ながら照明まで手がまわらないというように見受けられる。海外から照明関係者が来て国立の博物館を見せると、「日本の照明デザインはどうなっているのか?」と聞かれて、困ったことが何度となくある。会場は全体に創立当時のまま、陳列ケースの中にはたまたま明るさを得るためだけの光というものがほとんどで、これではせっかくの展示品を正しく見せないばかりか、せっかくの美術品を見る感動を著しく損ねてしまう。

日本の文化を世界の人々にアピールするために、もっと光の効用を積極的に採り入れることを関係者の方々にぜひお願いしたい。あるフランスの照明関係者が私に「光の用い方は文化を計るバロメーターである」といった言葉を私は忘れることができない。

豊かになつた日本でも、まだまだ遅れている部分、見過ごされている部分も多い。博物館、美術館の照明もそんな一つではなからうか。